

---

六本木アートナイト2025 大学連携プログラム  
六本木アートナイト2025 × 慶應義塾大学アート・センター  
「都市のカルチュラル・ナラティブ」  
慶應義塾ミュージアム・commons共同プログラム

---

実施報告書



六本木アートナイト実行委員会



---

## 1. 本事業の概要

### 〈企画タイトル〉

六本木アートナイト2025×慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」  
慶應義塾ミュージアム・コモنز共同プログラム

### 〈開催主体〉

六本木アートナイト2025(六本木アートナイト実行委員会)  
慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト  
慶應義塾ミュージアム・コモنز

### 〈企画概要〉

本プログラムは、六本木アートナイトと慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトおよび慶應義塾ミュージアム・コモنزによる共同企画として、都市型芸術祭である六本木アートナイトのフィールドを活用し、慶應義塾大学の学生を対象に全10回のワークショップを実施したものである。

ワークショップの導入段階では、森美術館での展示鑑賞プログラムを組み込み、六本木エリアに対する理解と関心を高めるとともに、参加学生が現代アート作品を主体的かつ批判的に鑑賞するための態度形成を促した。さらに、現代アートの基礎的知識を得るインプット講座を実施することで、一過性の鑑賞にとどまらず、継続的に深く作品と向き合うための学習機会を創出した。ワークショップでは、六本木アートナイト2025の展示を題材に、学生が現代アートに親しむための多様な鑑賞手法を探究した。専門的にアートを学んでいない学生にも門戸を開き、各自の関心領域や専門分野の視点から都市とアートの関係を多角的に捉え直すことを促した。参加学生は、六本木アートナイト2025の参加を起点に、振り返りやディスカッションを行ったほか、フィールドワークやZINE(小冊子)の作成といった実践的なアクティブラーニングを取り入れながら、都市文化や街づくり、アートの社会的役割について多面的に理解を深めた。美術史特殊Ⅱ(担当教員:本間友先生)および総合教育セミナー(担当教員:市川佳世子先生)の授業と連携し、レクチャーや鑑賞から得た学びをもとに、自身の視点で掘り下げたテーマをZINEやレポートとして制作し、また学びの成果を発表する場を設けた。これらの取り組みにより、学生が現代アートと都市を結びつけて理解するための視座を広げ、多世代に開かれた持続的な学び合いの場の創出を試みるものとした。

### 〈事業の背景〉

六本木アートナイトは、官民一体の事業として幅広い関わりとともに成長してきたが、「産学官」の「学」との連携を一層強化すべく、地域の教育・研究機関である慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトとの共同企画を2019年度より開始している(2023年度より慶應義塾ミュージアム・コモنزが参画)。六本木アートナイトを通じて、港区の六本木エリアが将来にわたり、芸術文化の街となる基盤の確立や、アートを利用したエリアブランディングの効果的な発信方法を模索するため、慶應義塾大学アート・センターの専門分野である「アート」や「アーカイブ」「都市のナラティブ」を切り口とするワークショップにフィールド提供を行うこととした。また、地域の若年層とともに、六本木アートナイトのように街中で展開するアートの役割を再考することで、長期的な観点からアートを用いた活動的で豊かな地域社会を実現していく可能性を模索するねらいがある。

---

### 〈目的〉

- 六本木アートナイトへの学生参加を増やし、長期的な視点で六本木エリアにある美術館等の施設へ若年層が足を運ぶことを促す契機の創出。
- 港区内の現役大学生を対象に、地域の文化資源の発掘と現代アートの鑑賞機会の提供。
- 現代アートに対する親しみや関心を高め、理解を深める。
- 六本木アートナイトに参加し、その体験を掘り下げて語り合うことで、現代アートと日常・社会の結びつきを学ぶ。

### 〈開催期間〉

- ワークショップ実施期間：2025年7月～2026年1月

### 〈主な会場〉

- オンライン (Zoom 使用)
- 慶應義塾大学講義室
- 六本木アートナイト 2025 各会場

### 〈対象〉

- 総合教育セミナー Dab (Ⅲ類) 受講生 (担当教員：市川佳世子先生)
- 美術史特殊Ⅱ受講生 (担当教員：本間友先生)

### 〈参加人数〉

- 慶應義塾大学の参加学生：25名 (延べ数)

---

## 2. 実施内容詳細

ワークショップ全10回(個別ワークや制作・レポート執筆時間を除く)

活動時間: 秋学期を中心とし木曜日5限(16時30分~18時)の授業時間内に実施した。

### #1 | 7月17日(木) 現代アート(建築展)の鑑賞(森美術館/六本木)

講師: 白木栄世氏(森美術館ラーニング・キュレーター)

会場: 森美術館(「藤本壮介の建築: 原初・未来・森」展、森美術館ラーニング・ルーム)

森美術館のスクールプログラムに準じ、参加者が展示を個別に鑑賞した後、展示空間や作品の背景、キュレーションの意図に関するレクチャーを実施した。事前に学生から寄せられた質問をもとに、展覧会が都市・公共性・観客体験とどのように接続しているのかを多角的な視点から考察し、作品鑑賞の基礎的な経験を実践的に積む場とした。

### #2 | 9月27日(土) 14時~16時 六本木アートナイト2025 鑑賞

講師: 田中・ジョン・直人氏

会場: 六本木アートナイト2025 作品展示会場、六本木街中

ファシリテーターの案内のもと、六本木アートナイト2025の作品を鑑賞・体験した。街中に展開される展示作品を実際に見て回りながら、六本木エリアの文化的特性や歴史的背景について学んだ。加えて、会場ではアーティスト・胡宮ゆきな氏による作品《平和なんて朝飯前(10XL) vs 平和なんて朝飯前(10XL)》の解説が行われた。参加学生は作品の前で制作者であるアーティストから直接話を聞くことで、制作の背景や意図への理解を深めた。現地での体験とレクチャーを通じて、都市空間におけるアートのあり方を実感的に捉える機会とした。なお、今回は授業時間外の実施であったため、参加は任意とした。

### #3 | 10月2日(木) 六本木アートナイト2025 参加報告会(ハイブリッド形式)

秋学期の初回授業として、六本木アートナイト2025参加後の振り返りとし、全体像を整理するためのイントロダクション・レクチャーを実施した。六本木アートナイトの企画趣旨や構成、鑑賞体験の特徴をあらためて確認するとともに、各自の体験を言語化・共有するための視点を提示し、今後のアウトプットに向けた素材収集と整理を行った。

### #4 | 10月9日(木) アーティスト・トーク(オンライン)

講師: 胡宮ゆきな氏(六本木アートナイト2025参加アーティスト)

トークでは、作品制作に至る動機や創作のプロセス、テーマ設定の背景に加え、社会とのつながりの築き方や、アーティストとして活動する上での視点について幅広く共有いただいた。制作そのものにとどまらず、アーティストが社会課題やコミュニティとどのように向き合うのかといった話題にもおよび、参加学生にとって、現代に生きるアーティストの実践を直接聞く貴重な機会となった。初めて現役アーティストと対話する学生も多い中、胡宮氏の率直な語りは、学生の視野を広げる新鮮な体験となった。

---

## #5 | 10月16日(木) 六本木アートナイトの企画運営(オンライン)

講師：三戸和仁氏(六本木アートナイト実行委員会事務局長)

六本木アートナイト実行委員会事務局長による、アートと街、エリアマネジメントをテーマとしたトークを実施した。これまでの六本木アートナイトの取り組みをエリアマネジメントと芸術文化の視点で紹介。六本木エリアにおける文化芸術を活用した街づくりの背景を共有し、官民一体となって街への関わりを広げてきた六本木アートナイトの活動をより深く探る機会とした。

## #6 | 10月23日(木) アートフェスティバルとは？(オンライン)

講師：山本浩貴氏(文化研究家・実践女子大学准教授)

アートフェスティバルを主題に、国内外の事例を参照しながら、その成立背景や特徴を整理するレクチャーを実施した。アートナイトを含む都市型芸術祭を文化研究の視点から位置づけ、芸術と街、公共空間との関係性について理論的に考察する機会とした。さらに、現代アート概論として、現代アートの基礎的な定義や歴史的背景を整理するとともに、作品を鑑賞する際の基本的な視点や考え方について解説を行った。

## #7 | 10月30日(木) 振り返り／アウトプットへ向けたディスカッション

これまでの講義やアートナイトでの体験を振り返り、各自の鑑賞体験や気づきを共有するディスカッションを実施した。体験を個人的な感想にとどめず、言語化・整理するプロセスを通じて、レポートや発表など今後のアウトプットに向けた視点の明確化を図った。

## #8 | 12月18日(木) システム×デザイン思考ワークショップ

六本木アートナイト2025を題材に「システム×デザイン思考」の手法を学び「問い」をたてるための思考アプローチを学んだ。これまでのレクチャーから、六本木アートナイトのステークホルダーを可視化させる作業を行い、都市において現代アートやアートフェスティバルが生み出す有形無形の価値循環について考える機会とした。

## #9 | 1月8日(木) 成果発表会・リハーサル

参加学生の発表準備、慶應義塾大学教員によるフィードバックを行った。美術史特殊では、最終成果物として一連の講義で学んだことをZINE(小冊子)としてまとめるべく、イラストレーター等のツールを実際に使い、DTPを学びながら制作を進めた。総合教育セミナーでは、参加学生同士がお互いのレポートにピアフィードバックを行う時間を設け、最終発表に向けた準備を進めた。

## #10 | 1月15日(木) 成果発表会(合同・最終)

美術史特殊の参加学生は、一連の講義をもとにZINE(小冊子)を制作し、成果物の発表とした。総合教育セミナーの参加学生は、レポートの提出を最終的な課題とし、「可能性に満ちた現代アート―街を活性化する文化資源」というテーマで、グループ内でディスカッションやリサーチをした内容を発表とした。担当教員や六本木アートナイト実行委員会事務局長、アーツカウンシル東京、東京都担当者からのフィードバックを含めて、まとめを行った。

## 記録写真



#1 | 白木栄世氏によるレクチャー  
「藤本壮介の建築：原初・未来・森」展 会場：「森美術館ラーニング・ルーム」



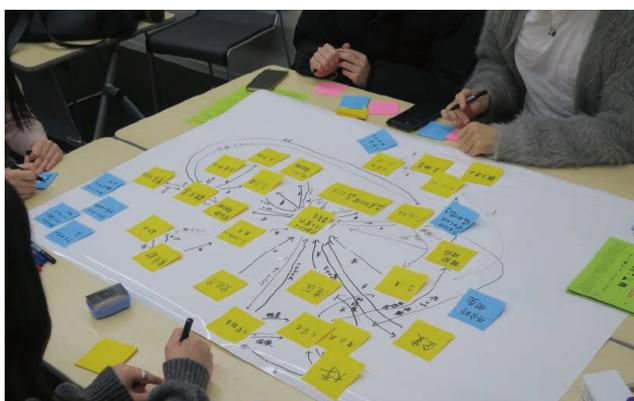
#2 | 田中・ジョン・直人氏による作品解説



#2 | 田中・ジョン・直人氏の説明を聞きながら作品鑑賞



#2 | 胡宮ゆきな氏による作品解説



#8 | 付箋を使ってのステークホルダー可視化作業



#10 | 総合教育セミナー参加学生による成果発表



#10 | 美術史特殊の参加学生による成果発表



#10 | 制作されたZINE(小冊子)の数々

---

### 3. 参加学生からのフィードバック

#### ◎ワークショップに参加した感想

- レクチャーを通じて、六本木アートナイトを運営している方やアーティストの実際の声を聞けるのはとても貴重な経験だったので、受講してよかったです。また、それらの学びをZINEに落とし込んでいくという作業が、自分が思っていた以上に頭を使う作業で面白かったです。半年間、本当にお世話になり、ありがとうございました。次年度も六本木アートナイトに行こうと思います！
- 現代アートとアートフェスティバルへの解像度が高まりました。アーティスト側と開催側どちらからも意見、説明が聞けたことで学びが深まりました。
- 実際に六本木アートナイトへ出展されたアーティスト、企画を担当した運営側のお話を生で聞く機会が持てたことが貴重だった。ただ鑑賞しに行くだけでは読み取れない作者の発想、背景や運営側の苦労はこの授業で取材をしないと永遠に知ることができなかつたかもしれないので、このような機会を体系的に作ってくれるこの講座を受講することができよかったです。
- 今学期の学びを通して、アートは生活と切り離された存在ではなく、日常の中に融合しているものであるということを初めて実感した。これは、日々の生活の中にあるさまざまな出来事や身近な物事から着想を得て、商品や作品を生み出すことができることだ。小さな物であっても、少し視点を変え、丁寧に観察したら、アート作品へと発展する可能性を秘めている。例えば、段ボールは普段であれば単なるゴミとして扱われがちだが、接点という発想を用いることで、アート作品へと変えることができる。また、さまざまなアートフェスティバルの運営面について学んだことで、無料で鑑賞できるアートイベントでも、実は非常に複雑なステークホルダーが存在していることを理解した。この経験を踏まえ、現代アートと都市開発の関係を考察する際には、こうした背景を十分に意識するようになった。都市ごとにアートの表現方法が異なるのは、それぞれの開発モデルや開発主体の違いに起因している部分も大きいと感じた。さらに、無料で行われるアートフェスティバルが、どのようにステークホルダーの中で成立し、持続していくのかという点についても、授業を受ける前に強い関心を抱いていた。授業やレクチャーを通して、六本木アートナイトにおける運営主体の仕組みや出資の仕方などを具体的に知ることができ、その点を非常に興味深く感じた。本学期のプログラムを通じて、現代アートと生活との関係性を理解できただけでなく、日本各地で行われている多様な芸術祭や展示会について知ることができた。現代アートは都市に限らず、観光資源として各地域の発展や観光事業の促進にも活用され得るものであると強く感じた。
- アートフェスの裏側・運営側のことまで深く知れること、そして運営側の立場でアートについて考える機会となったこと、実際にアートに携わる方々から直接お話を伺ったことで実感を得たことが良い学びになったと感じている。
- どのようなプロセスを経て、その年の六本木アートナイトが形づくられていったのか、制作の舞台裏や意思決定の過程をもう少し知ることができれば、作品やプログラムの見え方がさらに豊かになるのではと感じました。芸術祭を鑑賞する際はクリエイティブな人からきっちり金銭面を考える人など、多角的な視点で見たいと思いました。
- 六本木アートナイトに関して詳しい裏側を知ることができて大変学びになりました。できれば、講義を受けてから六本木アートナイトを見に行き、さらに実際に作品を見ながらお話を聞けると学習内容がどう現実表れているかのイメージがつきやすくていいのかな、とも思います。

- 
- アートフェスティバルについて、アーティスト、運営など様々な視点からお話を聞いた点は非常に有益な機会となった。
  - 非常に楽しみながら学ぶことができました。六本木アートナイトに関わる様々な人たちや、その思いに触れることができただけでなく、他の学生の発表を通じて、その周辺にある様々な問題を考える機会を得られたと思います。
  - アートフェスティバルに関わる芸術家、批評家や運営者という異なる視点を持つ御三方にインタビューをすることで、作品自体の特性やアートフェスティバルの歴史・構造を知ることができる、非常に実りの多いプログラムだった。
  - この多様な視点を得られるレクチャーを受講することで、アートフェスティバルや現代アートの本質について自分なりに考えることができた。またそれをZINEという形にアウトプットすることで、自分の想いを言語化し、それをデザインに落とし込むことの楽しさ・難しさを知ることができた。特に他の受講生のZINEの内容や視点、デザインはどれもユニークで素晴らしく、自分の不足を認識する良い機会となった。六本木アートナイト事務局長の三戸さんのお話にもあったように、将来的に自分の思考をプレゼンする際には、自分の関心を軸としつつ、受け手に何か変化を与えられるような言葉・デザインを生み出し、紡いでいくことが大切である。そのためには日頃から多くのものに意識的・批判的に接していくべきだと、みなさんの素敵なZINEをみて強く感じた。この学びを活かして、今後も頑張っていきたい。
  - 大学で学ぶ学問があまり面白くなく退屈だったのですが久しぶりに楽しかったです！ありがとうございました！
  - 六本木アートナイトの作品について客観的に学ぶだけでなく実際に出展経験があるアーティストや運営側のリーダーである事務局長から直接お話を聞くことができたのが、印象的だった。

---

## 4. 慶應義塾大学アート・センターからのフィードバック

市川佳世子(慶應義塾大学 商学部、慶應義塾大学アート・センター、慶應義塾ミュージアム・commons)  
本間友(慶應義塾ミュージアム・commons、慶應義塾大学アート・センター)

### はじめに

慶應義塾大学アート・センターの「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクトと六本木アートナイト(以下 RAN)は、2019年度より大学生向けのラーニング・プログラムを共同で実施してきた。自らの文化的体験に基づき、文化を発信することの価値を考え、その魅力を文章にして広く発信できる人を社会に送り出すことを目的とした「カルチュラル・コミュニケーター・ワークショップ」をベースに、年度ごとに多様なアプローチのワークショップをカリキュラム外で展開してきたが、2024年度からは大学の講義にプログラムの一部を組み込むことを試みている。その2年目となる2025年度は、前年度と同様に、慶應義塾大学日吉キャンパス開講講義(総合教育セミナー:市川担当)と、三田キャンパス開講講義(美術史特殊:本間担当)の中で、RAN2025 をフィールドとした連携プログラムを実施した。

「総合教育セミナー」は、主に商学部の1・2年生を対象に、教員と学生、あるいは学生同士が活発に交流を行うための少人数講義で、学生が自分の考えを論理的にまとめた的確に表現し、有益な議論を展開できる力を養うことを目的とした講義である。身近な都市の文化を体験し、文化が社会においてどのような有形・無形の価値循環を生み出しているのかについて考えを深めつつ、アカデミック・スキルズを身につけることを通年の目標としている。秋学期の講義では、RAN2025 を実際に体験し、様々な角度からアートフェスティバルに関わる講師陣のレクチャーをふまえ、現代アートと都市の関わりについて各自の関心に沿ってテーマを設定し、調査した内容を発表した後、レポートにまとめる学習活動を行った。

「美術史特殊」は、三田キャンパスの全学部に開かれた講義で、日吉の教養課程で身につけたアカデミック・スキルズをベースに、専門性を活かしながら、調査・研究した成果を他者に伝えるクリエイティブな方法を学ぶ講義である。秋学期の講義では、RANの体験とその後のレクチャー・トークを各々の関心に接続し、そこで得た学びを自分自身の言葉とデザインで表現する ZINE を制作する学習活動を計画した。

プログラムの大枠は前年度から引き継ぎつつ、前年度からの反省を生かして、現代アートを必ずしも専門としない学生のために、現代アートを見る機会を増やした。また、オンラインレクチャーの回も教室に集まるなど、学生同士の交流の場や、ディスカッションを通じて理解を深める機会を意識的に多めに設けた。

### プログラムの成果

まず、現代アートを大学の講義の題材にすることの良さを改めて感じる事ができた。現代アートには正解がないため、誰もが関わる事ができ、対話を生み出す事が学生にとって魅力に思えたようだ。RANは都市回遊型のアートフェスティバルであるため、街中に展示されている作品を見ながら、六本木という地域についても関心を深める機会となった。アートによって街の見え方が変わること、また作品も街中に置か

---

れることで見え方や意味合いが変わることを、見学やレクチャーを通じて体験することができた。現代アートを真正面から扱うことの良さは、作品がどのように見えるのか、またその見え方がどのように変わっていくのかを意識する中で、アートを通して自由に自分の関心と向き合える点にある。

現代美術は自分のこれまでの考えを揺さぶるものだという前提は必ずしも共有されておらず、コンテキストを変え、街づくりに転用されうるといった点も自明ではない。そのため、そうした視点を意識できるレクチャー・シリーズの重要性が浮き彫りとなった。今年度は現代アートとアートフェスティバルに関するレクチャーを初学者向けに調整してもらったことで、難しさの印象は残るものの、よりスムーズな導入を行うことができた。全体を通して、文化事業のマネジメント、文化行政そして都市開発といった視点からも芸術を考えうること、またアートが社会課題と深く関わっていることについての理解を促進することができた。

日吉の講義では見学やレクチャーの度にディスカッションの場を設け、現代アートに対する理解を深めるとともに、わからなさを丁寧に共有し、折に触れて体験を振り返り、考えたことを言語化する訓練を段階的に行った。その結果、現代アートやアートフェスティバルの価値や都市における役割をポジティブに捉えつつ課題を見出し、解決法を提示するレポートが仕上がった。最終成果については、外部講師の前で発表することを想定し、普段よりも広いオーディエンスを意識した準備を行うことができた。また、都市開発や行政に関心を持つ学生にとって、実際に現場で事業に携わっている方々と交流できる貴重な機会となった。

三田の講義では、「ZINE」という媒体の特性について丁寧な導入を行った。個人の関心に基づいて自由に表現し制作する自主的な制作物であり、小さな声を拾い上げるメディアであるというZINEの特性は、現代アートと重なりあう部分が多い。また、アーティスト、アドミニストレーション、美術研究者という異なる三者が三様にRANを語るというレクチャースタイルによって、RANが様々な個性ある主体の集合体であるということ認識することを通じて、学生が、自分はどうのような主体としてRANに関わりZINEを作るのかを思考することができた点に、大きな手応えがあった。

プログラムの実施を通して、改めて、現代アートというフィールドが、自らの関心を認識し、問いを生み出す訓練をする場として大きな力を持つことを認識した。また、アウトプットだけではなく、制作・調査・発表に至るプロセスそのものの重要性も実感した。

日吉と三田の合同プログラムとすることで、異なる専門領域で学ぶ学生の参加をえて、現代アートとアートフェスティバルについて、作品内容にとどまらず、企画運営や行政といった側面も含めて多角的に捉える視点が育まれ、アートと地域の結びつきを意識するなど、美術史や商学といった特定の分野に限定されては得られない関心の広がりが見られたことも大きな成果である。

## プログラムの運営

今後のプログラム実施にあたっては、アウトプットのあり方をよりブラッシュアップしていきたいと考えている。日吉では、伝統的なレポートという形式を採用したが、学生と教員からなる講義のメンバーの外に思考を伝えていくような、よりオーディエンスを意識した成果物を作成すると、大学という枠組みを超えた

---

このプログラムの特性をさらに活かすことができる。

また、日吉のレポート、三田のZINEに共通する課題としては、ディスカッションや調査記録などのプロセスが、最終報告からは見えないという点があった。プログラムを実施する中で、教員として印象的だったのは、学生たちがアーティストや講師に質問をする／作る際、自分の言葉を使ってきちんと思考しようとしていたことだった。これは、社会を自分の目で見つめ直し、問題提起を行うという現代アートの枠組みが、学生の行動に影響を与えているとも考えられる。他者の意見を聞き、それを自分の関心に接続し、対話を行っていくことは、ディスカッションやアクティヴ・リスニング等、社会的なスキルの獲得にも繋がるため、このプロセスをどのように可視化しプログラムの中で活用していくのか、今後検討していきたい。

昨年度からスタートした新たな枠組みでのプログラム運営だが、本年の実践を通じて、カリキュラムや運営方針の妥当性については確認することができた。今後は、プログラム実施の中で確認された、大学における学びの更新といった新たな可能性を展開させることにも挑戦したい。また、大学やアートフェスティバルにおける教育プログラム事例との比較を通じて、本プログラムの意義を改めて明らかにし、関連学会・論文誌などで報告できればと考えている。

## 〈共同開催〉

### 慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」プロジェクト

現代文化の発信地、国際都市として知られる港区は、同時に、多くの寺社仏閣や史跡、そして歴史ある企業が所在する歴史文化都市でもあります。このダイナミックな時間軸をもつ都市文化の眺望を、一層明らかにするためのプロジェクトが、「都市のカルチュラル・ナラティブ」です。文化を巡る学術的な成果を前景化し、今昔の文化資源を相互につなぎ、文化の物語(カルチュラル・ナラティブ)を結像することによって、現代・将来の芸術文化活動を支え、文化観光の深化を図り、日本の文化に寄せられる国際的な関心に対応することを目指しています。

### 慶應義塾ミュージアム・コモنز

慶應義塾ミュージアム・コモنز(KeMCo)は、慶應義塾が長い歴史の中で蓄積してきた、美術、考古、文学、歴史、医学など多様な領域に渡る文化財コレクションと、その背後にある教育・研究活動をつなぐ「ハブ」となるミュージアムです。デジタルとアナログが融け合う環境のなかで、文化財(オブジェクト)を基点としてさまざまなコミュニティが交流し、新たな発見や発想を生み出す場となることを目指しています。

## 六本木アートナイト 2025

- 開催日時： 令和7年9月26日(金)～9月28日(日)  
※26日(金)18:30～22:00、27日(土)13:00～22:00、28日(日)13:00～20:00
- 開催場所： 六本木ヒルズ、森美術館、東京ミッドタウン、サントリー美術館、21\_21 DESIGN SIGHT、国立新美術館、六本木商店街、その他六本木地区の協力施設や公共スペース
- 主催： 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 アーツカウンシル東京、港区、六本木アートナイト実行委員会【国立新美術館、サントリー美術館、東京ミッドタウン、21\_21 DESIGN SIGHT、森美術館、森ビル、六本木商店街振興組合(五十音順)】
- 助成： 文化庁  
韓国文化体育観光部、韓国国際文化交流振興院・駐日韓国大使館 韓国文化院  
※韓日国交正常化60周年事業  
台湾文化部

六本木アートナイト2025×慶應義塾大学アート・センター「都市のカルチュラル・ナラティブ」

慶應義塾ミュージアム・コモنز共同プログラム報告書

発行年月：2026年3月

発行者：六本木アートナイト実行委員会

〒106-6150 東京都港区六本木6-10-1 六本木ヒルズ森タワー

森ビル株式会社 森美術館内

URL：<https://roppongiartnight.com/2025/>